

京都橘大文学部准教授

南 健太郎さん(43)

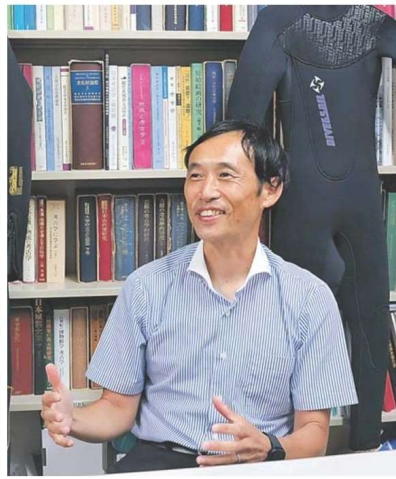
水中考古学

沈没船や積み荷 水辺で生活していた人々の足跡を示す「水中遺跡」。国内で把握されている陸上の遺跡の数が約47万カ所とされる一方、水中遺跡は400カ所にも満たない。文献上では確認できない歴史を学生とともに掘り起こしている。

主要な調査対象の一つ、坂本城(滋賀県大津市)では、2022年からの調査で、琵琶湖の湖底にこぶし大から人の頭ほどの大きさの礫が人為的に配置されていることを突き止めた。陸地から突き出す

水に沈んだ記憶 掘り起こす

ように船着き場や防波堤が設けられていた可能性があるという。現存する資料が少ない中、城周辺の構造や琵琶湖と



探究人

歴史の真相に迫りたい

のつながりを解明する糸口をつかんだ。

京丹後市や舞鶴市など、日本海でも調査を進める。中国大陸から府北部に渡る交易ルート

発見に期待を寄せる。

水中遺跡の発掘は、陸上に比べて調査が進んでいないケースが多く、大きな成果が期待できる。水中では木材の腐食が進みにくいため、当時の原形をとどめたまま発見されることが多い。「生活拠点としての陸上と、漁業などなり

らぬまま消滅していくのではな

わいの場として考えられる水上の双方をつなぎ合わせるこ

県立大4年時に訪れた中国東北部での遺跡調査で、日本の歴史が大陸と切り離せないことを肌で感じ、国際交流と日本

熊本の博士課程を修了後、岡山大学蔵文化調査センター助教を経て、22年から現職。京都橘大への赴任のタイミングで文化庁が出版した「水中遺跡ハンドブック」をきっかけに海や湖での調査に取り組みようになった。水中での調査は気象条件に左右されたり、陸上より時間がかかったりするなど苦労も多いがそれを上回るやりがいがあるという。

日本での沈没船の発見はまれだが、「発見されている構造船で最も古いのは元寇のもの。誰も見たことのない船を発掘し、水中から歴史の真相に迫りたい」(湯沢宏志)